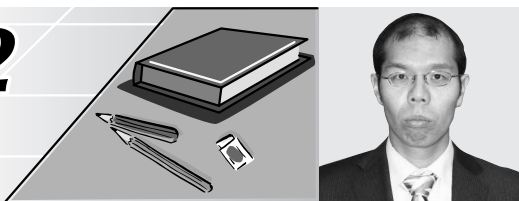


学生時代と図書館 72

— 匂いと光、フェチの解剖 —

菊池 正和



実は私には一つのフェティシズムが存在する。本を読むときに、親指でページをパラパラめくりながら、鼻を近づけその匂いを嗅いでしまうのだ。10分、いや5分おきにそうしているであろうか。1冊の本を読み終えるまでに、数えきれないくらいページの間から薫る微風を鼻孔の奥で受け止める。紙質やインクの多寡、そして本の古さ、ひょっとすると書かれている内容によっても微妙に匂いが違っているのかもしれない。

図書館という響きは、そんな私を、重く、さわられるほどに濃密な書庫の気の中へと誘う。大学時代、文学部図書館の地下書庫によく本を探しに降りたのだが、そこではページの内部に積み重ねられた時間が芳醇な澁みを形成していた。決して嫌いな匂いではなかったのだが、そこに長く留まることはできなかった。息が続かなくなり、空気の流れや、軽さや明るさのようなものを求めて上階へ浮上するのだった。

そう、読書や研究をするためには、もう一つのフェチ対象である陽光が必要だった。先の文学部図書館にも、落ち着いて自習できる適度な広さの閲覧室があったのだが、その空間は隣の校舎の陰になっていて陽が差さなかった。先行研究を読みながらノートを取りつつ考えをまとめるときには必ず、学内で一番大きな附属図書館へ移動し、大きな窓に面した共用机の上にわざと辞書や何冊もの本、ノート等を大きく広げて空間を確保した。陽光の中に埃の粒子が舞うのが見えるような明るさが好きだった。そして、時々ふと顔を上げては、窓の外に広がる木々や歩いている学生たちに目をやり、それから部屋の中に視線を戻しては、勉強したり寝ていたりする学生の姿や、静寂の中のざわめきを確認していた。思えば、他人を観察することで、孤独な読書や研究作業とのバランスを取っていたのかもしれない。あるいは、ただ単に集中力がなかっただけかもしれないが。

もう一つ印象に残っている図書館がある。ポ

ローニャ留学時代によく訪れていた、アルキジナージオ宮にある市立図書館だ。街の中心のサン・ベトロニオ聖堂を右手に見ながら、ポルティコの下を歩いていると、瀟洒なショーウィンドウと並んで、その小さな入口がある。アーチの扉をくぐると正面には中庭があり、その明るく深閑とした穏やかさが迎えてくれる。ただ、図書館へ向かおうと回廊の左右にある階段を上ろうとすると、厳めしい気配と過去の息吹に包まれる。壁中に誇らしげに、そして少し窮屈そうに夥しい数の紋章が並んでいる。かつてこの建物がポローニャ大学の本部であった頃、通っていた貴族の子弟たちが残していったものだ。

図書館に入ると、貴重書・手稿の部屋やレファレンス、コピー室などを抜けて、一番奥の閲覧室へと急ぐ。中央部分が吹き抜けになった3階構成の空間で、各階の四方の壁が本棚になっている。そこで自習をしていたのだが、視線の高さに勿論窓はなく、遥か高い窓からの光は教会を思わせるような白く、淡いものであった。外国人ゆえであろうか、周りの学生を観察する以前に、私の方が控えめな好奇の視線を受けていた。そしてついに、その後しばしば言葉を交わすことになるガイドが私に尋ねてきた。「お前、何をしているんだ？本の匂いを嗅いでいるのか？」

集中力が途切れると、同じ階にある解剖学教室に立ち寄ることもあった。階段状になった木製の座席に腰をおろし、中央の何も載っていない解剖台を見ながら、「まな板の上のコイ」よろしく解剖されている自分の姿を想像したりしていた。今、回想してみると、図書館は私にとって、本や論文の内側にある思想を分析する場所であったと同時に、他人の中にいる自分を観察し、その嗜好を解剖する空間であったようにも思うのである。

きくち まさかず(講師・イタリア文学)